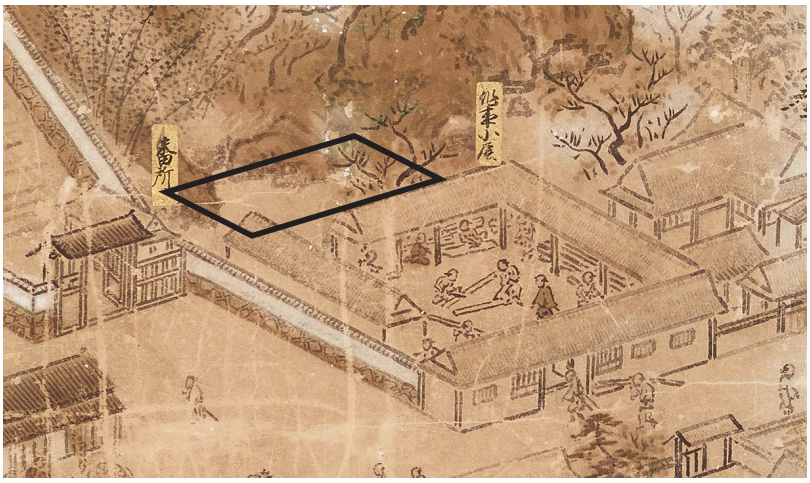
宇和島城作事所跡発掘調査現地説明会

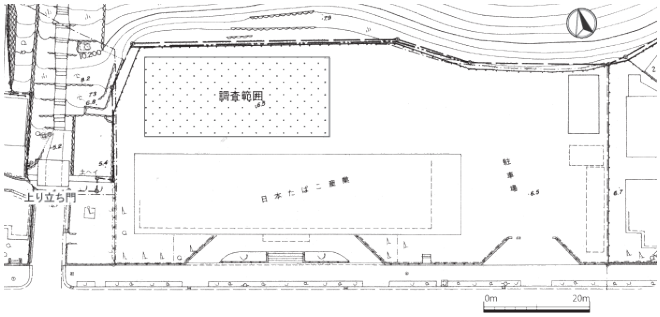


宇和島城下絵図屏風 (元禄末 (1700 年) 頃) 伊達博物館所蔵

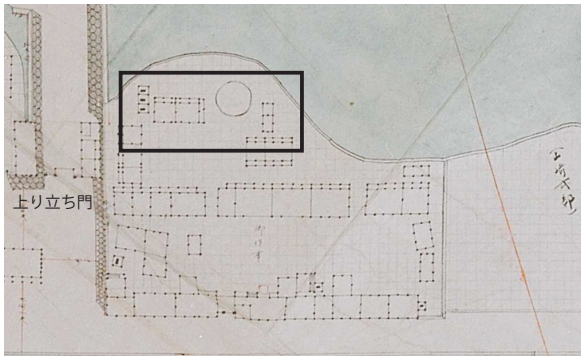
◆調査の概要

宇和島城作事所発掘調査において、近代の小学校の基礎、江戸時代の作事所にかかわる池と鍛冶関連遺構を確認しました。

調査地：宇和島市丸之内 2 丁目　調査面積：522 ㎡



発掘調査位置



宇和島城絵図（正徳元（1711）年）
公益財団法人宇和島伊達文化保存会

◆調査地の来歴と経緯

藤堂高虎が宇和郡に入った慶長元（1596）年より武家屋敷として使われ、宇和島伊達家 2 代藩主宗利による城郭改修によって作事所となり幕末まで使用されました。明治以降は学校用地となり、昭和 20 年に空襲を受けるまで使用されました。戦後は日本専売公社の営業所として使用されていましたが平成 27 年に閉所、市教育委員会の試掘調査によって遺跡の残存が確認され、平成 28 年に史跡宇和島城に追加指定されました。今年度市教育委員会によって遺構確認調査を行っています。

慶長～寛文（1596 ～ 1660）	武家屋敷
寛文 4 ～ 11(1664 ～ 1671) 年	作事所
明治 5(1872) 年～昭和 20(1945) 年	各種学校用地
昭和 25(1950) 年～平成 27(2015) 年	日本専売公社～日本たばこ産業
平成 27 年 6 月	試掘調査
平成 28 年	史跡追加指定・宇和島市が取得
平成 29 年 8 月～	確認調査

不許転載

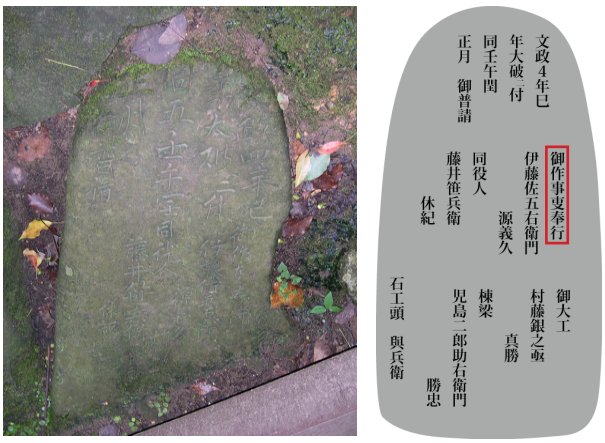
◆作事所とは

愛媛教育協会北宇和部会 1917『宇和島吉田両藩史』

「作事奉行　城郭を始めとし一切の建築営繕のことを管掌し、又領内此の種の職工業者に関する事件を管掌したるが如し」

⇒大工・大工仕事にかかわる物事を統括する作事奉行の役所・作業所。

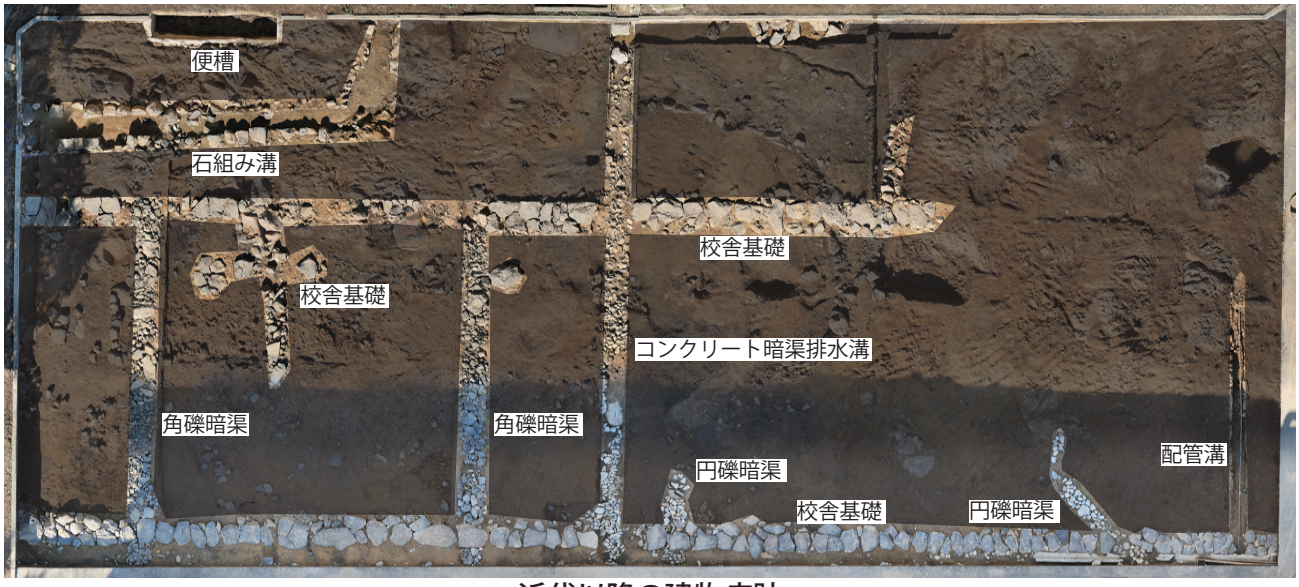
井戸丸井戸枠石組みに残る碑文からは作事奉行の下に作事所役人、大工、棟梁、石工頭などが作業したことがわかります。



宇和島城井戸丸井戸枠碑文

◆調査成果

今回の調査では、日本たばこ産業の建物・構造物、第二尋常小学校の校舎・溝、作事所の遺構が確認できました。

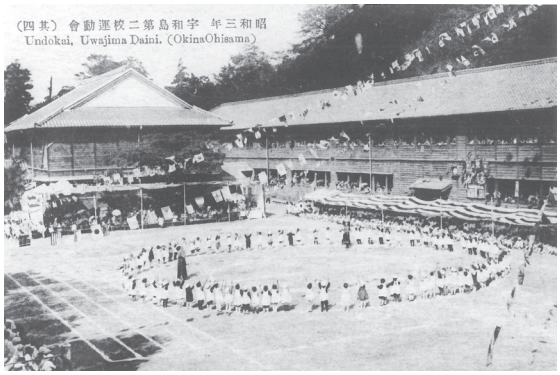


近代以降の建物痕跡

◎日本専売公社（日本たばこ産業）時代の遺構：暗渠排水溝・配管溝・円礫暗渠

◎学校施設の遺構：校舎基礎・石組み溝・角礫暗渠・便槽

調査地は専売公社時代には大きな建物が建っていたことはありませんでしたが、調査地中央に城山際の側溝からつながる排水溝が作られていました。学校施設としては校舎の基礎が残っていたほか、石組みの溝やトイレの便槽などを確認しました。

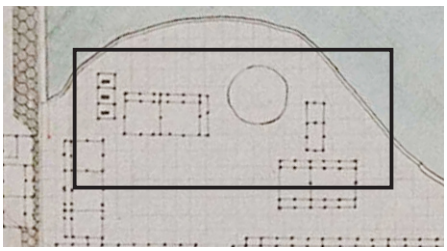


宇和島第二尋常小学校（昭和 3 年）

日本専売公社航空写真（昭和 40 年頃）

不許転載

◎作事所の遺構：池・鍛冶関連遺構・礎石



宇和島城絵図（正徳元（1711）年）
公益財団法人宇和島伊達文化保存会

池 調査地の北西側と東側は近代以降に岩盤を削平した平坦面となっており、作事所跡の遺構が確認できたのは調査地中央から南西側の範囲でした。調査地中央では半円形に石列が並び、北西側の終端は南側に面を持った石材一段で岩盤に取り付いており、東側のトレンチでは二段積みの石組みとなっていました。池を埋めた土の中からは伊達家の家紋「竹に雀文」の一部と考えられる瓦や、人の手によって加工された木材が出土し、杭列や丸太を組んだ木組を確認しました。

江戸時代の絵図では円形に描かれた部分に相当し、今回の調査成果から池を示していたものと考えられました。池の用途としては作業用水の確保や木材の貯蔵などが考えられますが、東西に岩盤が迫り谷地形となっているため、城山からの流水を管理するためのものとも考えられます。

江戸期の遺構

鍛冶関連遺構 今回の調査では鍛冶関連の遺構（Ｆ１～８）・遺物が多数確認されました。Ｆ１では炭が集中しており、他の遺構と比較すると大きな鍛造薄片が出土しています。Ｆ２～４では土の表面が熱を受けた範囲を確認し、鍛造薄片も確認しました。Ｆ５・Ｆ６は鉄滓や炉壁、炭、鉄釘など鍛冶に伴う遺物を多数含んでおり、鍛冶関連の遺物を廃棄したゴミ穴と考えられます。Ｆ７では焼土や炉壁、鉄滓を検出しています。元々の位置からあまり動いていない部分もあるものの破損しており、瓦と粘土で埋められていました。埋められた瓦には「御作事」というスタンプが押されているものがあり、城内で出土する瓦から 19 世紀代に作られたものと考えられ、その頃には埋められていたものと思われます。Ｆ８はＦ４の下層で検出され、鍛造薄片を含む焼けた土の範囲を確認し、Ｆ４より古い時期の鍛冶関連遺構であることがわかります。

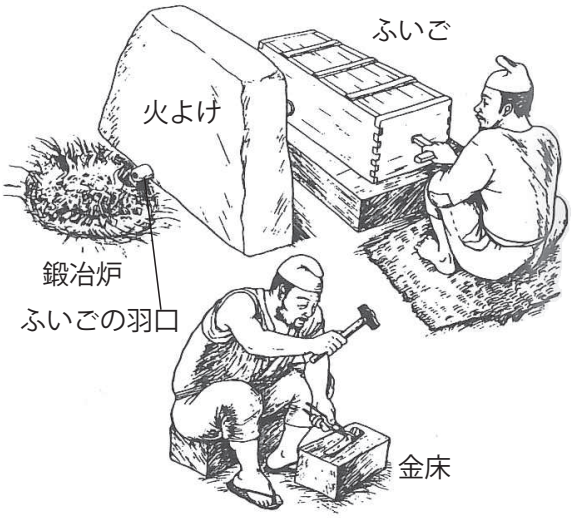
不許転載

鍛冶と鍛冶関連遺物について

鍛冶には大鍛冶と小鍛冶があります。大鍛冶は「たたら製鉄」などの砂鉄や鉄鉱石から鉄を造る事を言い、小鍛冶は釘や刃物などの鉄の製品を作ることを言います。作事所では小鍛冶が行われていました。

鍛冶関連遺物として、鍛造薄片・鉄滓・炉壁等が出土しています。

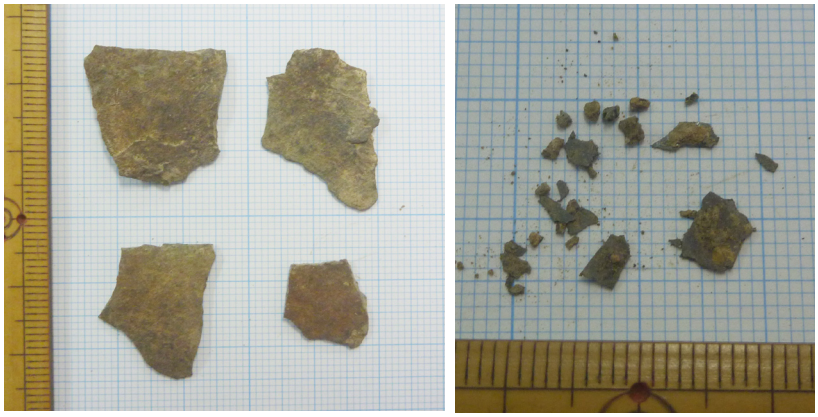
鍛造薄片は熱した鉄を金槌でたたいた際にはがれる鉄片です。高温で鍛冶を行うと大きな破片がはがれるためＦ１付近には高温操業の鍛冶炉があったものと推定できます。



小鍛冶の風景

出典：潮見浩 1988『技術の考古学』

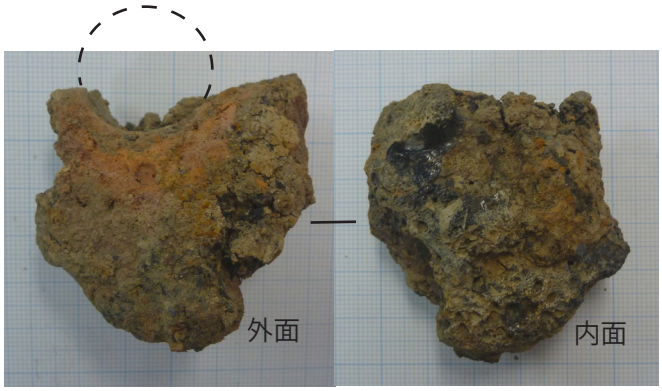
鉄滓は鍛冶で鉄を熱した際に鉄より溶融温度の低い金属などが溶け出て鍛冶炉の底にたまったものです。鍛冶炉の一番底にたまるものはお椀の形となるため椀形滓といいます。Ｆ８付近では大型の椀形滓が出土しており、大きな鍛冶炉があったことが推定できます。



鍛造薄片（左：Ｆ１出土、右：Ｆ４出土）

椀形滓（左：Ｆ８付近出土）

炉壁は鍛冶炉や火よけの壁です。火の起こる面（内面）は熱を受けて土が溶けたり、鉄滓が付着したりします。今回の調査ではふいごの羽口が出土しませんでしたが、Ｆ６出土の炉壁に直径３㎝ほどの円形の穴が開いていた様子が確認できたことから火よけの壁に直接穴を空けてふいごから風を送っていたことがわかりました。



送風口のある炉壁（Ｆ６出土）

◆まとめ

宇和島藩の作事所では、絵図で確認できた木材加工と、これまで知られていなかった鍛冶（鉄器生産）が行われていることがわかりました。生産されていたものは調査では釘など小型のものしか出土していませんが、鍛冶関連遺物から大規模で多様な鍛冶が行われていたことがわかりました。鍛冶が行われた時代も①池が使われていた時代、②池が埋まったあとなど複数の時代のものが確認でき、継続して鍛冶場であったことがわかりました。

なお、今回の資料は整理途中のものを含み、調査の進展によって評価が変わることがあります。

不許転載